

【論文】

幸田成友論— 経済史から日欧通交史への断層 —

夏目琢史（一橋大学附属図書館研究開発室）

はじめに

幸田成友（1873 - 1954）は、明治・大正・昭和初期に活躍した日本の歴史学者である。日本中世史の原勝郎（1871 - 1924）、近世史の内田銀蔵（1872 - 1919）、あるいは同じく東京商科大学（のちの一橋大学）・慶応義塾で教鞭をとった経済学者の福田徳三（1874 - 1930）などと同世代であり、近代日本の歴史研究をけん引した人物の一人である。幸田は、東京帝国大学史学科の出身であり、『大阪市史』の編纂委員、京都帝国大学講師などを経て、東京商科大学、慶応義塾の教授をつとめた。とくに、慶應では、史学科の創設に尽力し、大きな足跡を残している。また、文豪・幸田露伴の実弟として当時から話題になることが多かった。しかし、幸田成友についてはその知名度に比して、史学史における位置づけは必ずしも明確でない。そもそも、幸田成友の研究は何をめざしたものであったのか。そしてそれは近代日本社会にとってどのような意味を持ちえたのだろうか。その点について模索していくことが、筆者の当面の課題である。

ただ、この課題に応えるためには、いくつかのプロセスを経る必要がある。通常、幸田成友は、実証主義者として生涯一貫した研究スタンスであったといわれるが、彼の研究は、決して一枚岩で語れるものではない。経済史研究、日欧通交史研究、書誌学など、幸田の研究範囲は広く、この点が幸田の歴史研究の全容を統一的に理解するのを難しくさせている。しかし、注目すべきは、昭和初期を境に、幸田の研究が、日本経済史から日欧通交史へと大きく転換した点であろう。明治・大正期、日本経済史家としてその名を轟かせた幸田が、なぜ、昭和に入ると日欧通交史の研究に没頭し始めたのだろうか。こうした研究路線の変更には、どのような意味が隠されていたのであろうか。この背景には、幸田の歴史研究を理解する上で欠かせない重要な要素があったように考えられる。本稿では、この点を明らかにすることによって、先に述べた課題に一步近づくことをめざしたい。

1. 幸田成友をめぐる研究の概況と課題

近年、幸田成友のような、20世紀初頭に活躍した歴史家に焦点をあてた研究が盛行である。たとえば、伝統的国体論と新しい国体論の対立・相剋の構図に注目した昆野伸幸氏の研

究<sup>1</sup>、戦前の「皇国史観」の形成・定着の過程を論じる長谷川亮一氏の研究<sup>2</sup>など、戦前の歴史家や政府（文部省の修史事業など）による歴史観の形成を多角的・批判的に考察する仕事が多く発表されてきている。とくに、松沢裕作氏は、文部省修史局で修史事業につとめ、東京帝国大学教員として多数の優秀な後身を育てた重野安繹と久米邦武について論じている<sup>3</sup>。また、黒板勝美の通史認識を分析した廣木尚氏は、近代日本において「枢要な地位を占めたアカデミズム史学」が、主体化・卓越化していく過程について、〈国体史にしてかつ国民史〉の正当化という側面から詳細に検証している<sup>4</sup>。

各氏の選択する対象は様々であるが、歴史学（とくに「国史」）が、当時の政治・社会との相互作用のなかで（「国体論」との関係のなかで）展開してきたことに注目している点は共通している<sup>5</sup>。こうした研究は、戦前の歴史学のなかに内在する「国体論的性格」（国体論的ナショナリズム）がどのような役割を果たしたのかを明らかにしていくことによって、戦前の特徴的な歴史観である「皇国史観」の性格を捉えなおそうとするねらいがある。しかしこれらの研究では、「アカデミズム史学」を推進した主体を東京帝国大学国史研究室に収斂させて理解する傾向があり、大正期を中心に盛り上がりを見せた「在野史学」や「郷土史研究」などを捨象している感が否めない。たとえば、「アカデミズム史学」なるものが、国民に対して超越的な態度をとれたかどうかは、「在野史学」や「民間史学」など当時の歴史学をとりまく状況をトータルに把握した上でなければ論じることはできないし、個々の歴史学者が直面していた時代背景や社会そのものに対する具体的な分析を欠いているようにみられる。明治期から昭和初期にかけての黒板勝美を代表とする「アカデミズム史学」なるものが、社会と超越した位置にあったとは到底考えられないし、もしも、「アカデミズム史学」が、政治や社会から超越したところに自己を規定しようとしていたとするならば、戦中期のイデオロギーとしての「皇国史観」が、ほかならぬ「アカデミズム史学」の内部から派生した論理をどのように説明することができるのであろうか。戦後歴史学が注目してきた研究者の社会的責任論を十分に加味していく必要があるだろう。

また、上記の問題にもつながるが、当時の「アカデミズム史学」自体も決して一様ではなかった。もちろん、戦前の日本史研究者の多くは、東京帝国大学の出身者で構成されていた。そのため大本である東大の国史を研究対象の第一義とするのは、研究上妥当な戦略といえるであろう。しかし、明治から大正・昭和初期にかけての歴史学をめぐる環境は、実に複雑である。反官学的な「民間史学」が台頭し、一方では経済学や社会学の分野からの歴史研究も生まれ始めていた<sup>6</sup>。当時の歴史学の状況をよりトータルに理解するためには、「日本社会

史」「文化史」「郷土史」などの「アカデミズム史学」の周縁でうごめいていたさまざまな歴史学の形を見落としてはならないだろう。その点もふまえた上で当時のアカデミズム全体を概観することによって、白柳秀湖の『民族日本の歴史』などが、「アカデミズム史学」とは異なり、「大衆」の心をつかむことができた理由もはじめて解明できるだろう<sup>7</sup>。同様に、国体論的ナショナリズムを中心に近現代史学を捉える見方も、たしかに一面では正論であるが、それだけですべてを語り尽くせるわけではない。当時の日本史学を東大國史研究室のみの問題とせず、より開かれた視野から考えていかななくてはならない。少なくとも、こうした前提がない限り、戦前の日本史研究の状況は「皇国史観」一色であったとか、その反面で実証主義研究に終始した研究者も存在したという物語は、ナンセンスである。

以上の研究史を顧みるなかで、東京帝国大学の史学科を卒業し、いわゆる国史研究者とは異なる経歴・路線を歩むことになった幸田成友をどう理解するかが一つのポイントになってくる。幸田成友は、慶応義塾・東京商科大学で教員をつとめる一方で、自治体史編纂や書誌学者など多彩な活躍をみせた。幸田は、いわゆる「アカデミズム史学」の枠内にとどまらず、自治体史編纂や商業教育にも尽力した研究者である。西洋流の概念を用いて日本史を考察する態度を嫌い、ランケ派の実証主義的歴史学を推進した学者である。文豪幸田露伴の弟ということも影響してか、「大衆歴史作家」との交流も盛んであった。その意味で、幸田は、「アカデミズム史学」と「民間史学」の間にあるマージナルな存在だといえるだろう。さて、幸田成友については、現時点で少ないながらも研究がみられる。ここでその主要なものを取り上げ、現時点で課題となる論点を整理しておくことにしよう。

#### (A) 西垣晴次氏の幸田成友論

幸田成友に対する本格的に検討した論考として、まず挙げられるのは、西垣晴次氏の論考<sup>8</sup>である。西垣氏によれば、『日欧通交史』は、「国内の統一、近世国家の成立と日本人としての意識の確立が互いに関連するという立場」「実証主義の立場にたつ歴史家としての見識」、「歴史は国家、社会の枠組みのなかで、まず、その分析がなされるべきで、そうした分析以前に個人の役割を考えるのは慎むべきだとする」立場がとられているという<sup>9</sup>。また同じく『江戸と大阪』についても、「江戸時代の江戸・大阪の二大都市を対象とするにあたり都市の枠組みを明らかにした点」を高く評価し、「まず市街地の形成と展開を示し、次いでその支配機構として町奉行・町年寄・名主などの諸役のことが述べられ、江戸と大阪の鳥瞰図が示される。そこから陸上と海上の両方面から江戸と大阪の交通が語られ、さらに金融・

御用金・米・油・株仲間と両都市の経済の実態が明らかにされる」<sup>10</sup>。しかしその一方で、「そこには人体を動かす血液ともいうべき都市住民の生活については、まさに禁欲的ともいうべき態度で触れられていない」とし、幸田の研究全体を「日本近代の歴史研究の未開拓の分野であった日欧通交問題、近世都市問題、自治体史の編纂（大阪市史）についてその基礎を黙々として切り開いたところに幸田の足跡をみることができよう」<sup>11</sup>とまとめている。

西垣氏の指摘は、刀水書房の企画である『20世紀日本の歴史家』の一項目における論考であり、限られた紙面のなかで論じられたものであるため、具体的な分析をともなったものではない。しかし、幸田の歴史研究者としての立場を明確に指摘したものであり注目される。

#### (B) 一橋大学歴史系教員による幸田成友論

幸田成友の日本史研究については、一橋大学の歴史担当教員からも指摘がみられる。まず、幸田成友の直接の弟子である増田四郎氏は、次のように述べている。

以上、本学御出身の四人の方を挙げたわけですが、在野的というか、帝国大学に馴染まないような形を最後まで持っておられたというか、あるいはそういう研究で新しい領域を開かれたのは、私の恩師であります幸田成友先生だと思います。幸田先生の一番大きなお仕事は何かと申しますと、それはあの全八巻から成る著作集のほかに、むしろ『大阪市史』を挙げなければならないと思います。『大阪市史』は七巻ありますが、あれはほとんど先生一人で書かれたもので、あれを基礎にして日本の社会経済史の徹底的な実証的研究をされました。そして江戸時代を中心とした研究が本学における講義になり、『江戸と大阪』だとか、それから先生の場合にちょっとハイカラなところがあって、西洋史の講義もされたわけですが、南蛮ものといいますか、耶蘇教関係のことに興味を持たれて、その研究の成果が、これも名著だと思います『日欧通交史』という本になって出ていますし、それから、先生は書誌学のことを非常にやかましく言われた。<sup>12</sup>

この文章から、増田氏が、幸田成友の歴史研究の特徴として「在野」的な側面を強調していることが読み取れる。東京帝国大学史学科出身の史家である幸田を「在野的」というのは些か無理があるとも考えられるが、先に述べたように、『大阪市史』の編纂や日欧通交史研究など、国史研究者とは違った角度から歴史研究にアプローチした姿勢は、「在野的」「帝国大学に馴染まない」といえなくはない。増田氏は、別の論考でも次のようにも述べている。

歴史研究におけるこのような姿勢（＝原典・原史料を重視する姿勢）に加えて、博士は根っからの江戸っ子気質であり、官僚主義をきらい、何よりも庶民の生活感情や生活様式に深い

共感を抱いていたため、国家本位の政治史に重点を置く当時官学の歴史家に反して、いわゆる社会経済史の道を開拓され、今日でも絶対に無視することのできぬ数々の実証的研究の諸業績をのこされた。<sup>13</sup>

一方、永原慶二氏は、幸田成友の歴史研究について、オランダ留学を画期として前後期に分けられるとし、前期を「個々に事実を解き明かしてゆくことに集中した」「都市経済史」の研究、後期を「日本とヨーロッパ諸国との交渉・交流にかかわる資料の蒐集・研究」（日欧交通史）であったと理解した<sup>14</sup>。そのうえで、前期・留学・後期を通じて、リースの影響が強かったことを指摘している。この点、基本的には西垣氏らと同様の評価といえるだろう。また、佐々木潤之介氏も、とくに幸田の著書『大塩平八郎』を高く評価し、幸田を「実証史学の先駆者」と規定した上で、「このような実証度の高さは、しかし、たんに研究のレベルの問題として片づけられるものではない。そこには、物事にたいする、個別的なものにたいする、尽きない愛情がある。その愛惜の情が、研究対象を江戸時代にとったことによって、みごとに発露されたのが、幸田史学であった。」<sup>15</sup>と述べている。

#### (C) 林基氏の幸田成友論

先述したように、幸田成友は、慶應義塾大学史学科の創設に深くかかわっており、いわゆる「三田史学」のなかでの彼の位置をとらえようとする研究もある。昭和12～15年（1937～1940）の間、幸田の教えを受けた林基氏は、次のように指摘している。

幸田成友の歴史家としての仕事は、大阪市史などを除けば、商大（一橋）のほうでの研究教育は副業みたいなもので、あとは全部慶應なのだから、彼の歴史家としての日本の史学史上の位置というのは、同時にまた三田の史学の日本の歴史学における位置という問題の重要な一環になるわけだから、三田の仕事としてやっていく必要があると思います。<sup>16</sup>

上記の文章に典型的にみられるように、林氏の視点はあくまで慶應義塾（三田史学）のなかにおける幸田成友の意義に限られてはいるが、幸田成友におけるリースの影響などを物語る貴重な証言となっている。林氏は、「幸田先生の具体的な仕事としては、いまの大阪市史の問題、それから江戸のこともあわせて研究して、総合的な近世経済史にすゝもうとした一連の研究、ただそれは残念なことに完成しませんでした。」<sup>17</sup>と述べているが、なぜ、幸田成友は経済史研究を未完成のままにしてまで、日欧通交史研究へと没頭していくのか、その辺の事情については、ほとんど述べられていない。

以上、幸田成友に対する主要な論考を整理してきた。もちろんこれ以外にも幸田成友について触れた重要な成果は多くあるし<sup>18</sup>、同時代の学者たちによる幸田成友に対する指摘も見逃すことはできない。しかし、現時点での幸田の評価は、「実証主義の先駆者」としての定評はあるものの、日本経済史、日欧通交史、書誌学など幅広い分野において貢献した研究者として断片的に理解されているに過ぎないだろう。幸田成友の研究をよりトータルに把握すること、換言すれば、明治・大正期から昭和初期の戦争へと進む日本のなかであって、幸田成友の歴史研究がどのように推移していったのかを構造的に理解する必要がある。

こうした状況を念頭においた上で、冒頭で述べた「なぜ幸田が1930年代を境に、日本経済史研究から日欧通交史研究へと研究を移行したのか」を解明していくことにしよう。

## 2. 『大阪市史』編纂事業から経済史研究へ

### 2.1. 幸田成友とその時代 — 留学体験を中心に —

まず、幸田成友の略歴を簡単に確認する<sup>19</sup>。幸田は、明治6年(1873)3月9日、東京神田山本町に生まれた。幸田家はもともと江戸城の表坊主であったが、明治期になってからは、成友の父成延は大蔵省の官吏として働いた。海軍の軍人になる郡司成忠<sup>20</sup>、文学者の幸田露伴は実兄であり、姉の延や妹の幸らも音楽家として活躍した。

東京帝国大学史学科在学した幸田成友は、当時「お雇い外国人」として来日していたドイツの歴史家リースに師事した。実際、林基氏が「幸田成友は東大でのリースの最大の弟子だった」<sup>21</sup>と述べているように、幸田とリースの関係性を強調する指摘は多く<sup>22</sup>、幸田自身も『凡人の半生』のなかで、「草稿も参考書も一切無しで講義する」リースが、実は、「講義に先だってノートを作り、それを再三再四熟読してさうして教場に出られ」、さらに「講義が済んでから更に若干の訂正増補を加へられ」ていたことを知り、「学問に対する先生の忠実、生徒に対する先生の親切、これに勝るものは無いと、自分等は痛く感激した。」と述べている<sup>23</sup>。ちなみに、幸田自身も講義の準備には妥協がなかったようである。林基氏によれば、「先生(=幸田成友)の講義はどれもすでに何度か手がかけられたもので、すっかり自家薬籠中のものになっていたにちがいないのだが、それでも先生は前日に必ず講義案を読みかえし、その後の研究成果をとりいれて書きかえないではすまされなかったのである。」<sup>24</sup>とい

では、実際、幸田成友の歴史学のなかに、リースの影響はどのように生きているのであろうか。その影響が端的にうかがえるのは、三浦按針（ウィリアム・アダムス）の研究である。これは、昭和9年（1934）頃に執筆されたものであり、そのほとんどが『史話 東と西』（1940年）に収録されている<sup>25</sup>。このなかで幸田は、リースが『平戸に於ける英利吉商館の歴史』において論じたアダムスの書簡について検討を加えている。しかし、この三浦按針の研究を別にすると、幸田がリースの研究を直接引き継いだ成果は見当たらない。ただし、東京帝国大学におけるリースの教育が、その後の幸田の研究を規定していることは本人の回想などからも明らかである<sup>26</sup>。

なお、先述しているように、幸田の歴史研究は、「日本経済史研究」と「日欧通交史研究」の二つに大別される（『幸田成友著作集』も基本的には、「経済史研究」「日欧通交史研究」「史伝」「書誌学」の四つに分けている）。一般に、明治以降の日本史研究は、原勝郎や内田銀蔵らの仕事に代表されるように<sup>27</sup>、「古代」・「中世」・「近世」という西洋由来の時代区分法の枠組みに即して研究が進められる傾向にあったが、幸田の研究は、こうした方法論とは一線を画している（管見の限り、幸田は、「中世」「近世」といった時代区分の用語を使用していない）。

幸田は、『大阪市史』から出発し、札幌などの日本経済史研究全体へと進み、さらに日欧交流史研究へと向かった。冒頭で述べたように、幸田の研究は、1930年頃を境として、日本経済史研究から日欧通交史研究へと主軸がシフトしたことが確認できる。なお、ここでいう「日欧通交史」研究とは、日本経済史研究からの延長ともいえる「東西貿易交流」が中心ともみられるが<sup>28</sup>、実際には、三浦按針（ウィリアム・アダムス）やイザーク・チチング<sup>29</sup>、ザビエル<sup>30</sup>など人物に焦点をあてた、交流史としての側面が強くみられる。この変化について、大塚久雄氏は、次のように述懐している。

夏もそろそろ終に近づいたころだったろうか。先生はこんなことを言い出された。「きみ、経済史なんかやめて、日欧交通史（マ）の勉強をしたらどうだい」というのである。そのころある評論家が、このせつ経済史の勉強などはじめる若い連中にはロクなのはいない、といった意味のことを書いてちょっとばかり話題になっていたので、はじめは、先生がそれを読まれて私をからかっているのだらうと思って居た。それも少しはあったようである。が、そのうち話はしだいに本当らしくなってきた。東京に帰ってから荻窪のお宅へ伺うと、あの立派な書庫の莫大な蔵書をみせて下さった上でその取扱いの注意まであたえられるし、また、きみはこれからスペイン語やポルトガル語もやらなくてはならぬが、その勉強についてはM先生にお願いしておこう、といわれる。<sup>31</sup>

これは昭和10年(1935年)のこととみられるが、いかに幸田が、この時期、日欧通交史研究に真剣に取り組んでいたかをよく示している。では、この変化の直接的な要因となった出来事とは何であったのか。時期から判断するに、その背景には洋行経験があったとみられる。実のところ幸田は、ヨーロッパに赴く以前は、日欧通交史の問題に、それほど高い関心をもっていなかった<sup>32</sup>。それは、木村毅氏の次の回想からも確認できる。

昭和三年、洋行するに先んじ、兄露伴の親友なる内田魯庵の家へあいさつに来た時、たまたま私(=木村毅氏)もその席にいて紹介された。  
ヨーロッパにいては、南蛮紅毛の研究を主題とするが、日本の方がこの種の学問はすすんでいるから、向うにいて学ぶべきことは、ほとんど無いと、この温厚でじみちの人にしてみればいささか気焔当るべからざるものがあつた。  
私も数か月をおいて留学し、ヨーロッパで会ってみると幸田博士は、立ちぎわの気焔をすっかりおさめ、オランダの文書館が未発掘の史料の大宝庫であるのに圧倒されておられる形であつた。<sup>33</sup>

幸田自身は、「欧州一覽」(1934年)と題する論考のなかで、次のように述べている。

外国旅行は内地旅行に比し、一倍苦しいこと、悲しいことがあるかほりに、一倍嬉しいこと楽しいことがある。昼間文書館へ通つて古い書類の中から日本関係の有力な史料を見出した時、夜更けて雑音絶え、ぱちぱち燃上るストーヴの前に蹲りながら会心の書を読む時、或は日本にあては所詮見ることが得ぬ西洋の遺物遺跡を眼前に見た時、一切の苦痛を忘れて如何に自分が幸福であるかを感じます。<sup>34</sup>

さらに、幸田は、『日欧通交史』(1942年)の序文でも同様の趣旨のことを述べており<sup>35</sup>、日欧通交史研究の執筆にいたる直接的な動機が、ヨーロッパ留学での体験に基づいていることは間違いない。ちなみに、幸田はこのほかにもオランダ留学の経験をいくつか文章にまとめており、そのほとんどが、幸田の著書『阿蘭夜話』(1931年)、『和蘭雑話』(1934年)のなかに収録されている。そのなかで、幸田は、欧州と日本の交流の歴史が、16世紀にまで遡ることに注目する。さらに、「ギリシヤ雑筆」の末尾では、次のように述べている。

飛行機で下瞰すると地勢がいよく分る。遠く日本を離れ、外国に居て日本を見ると、日本が一層よく分るやうな気がする。さうして自分は日本国民の一人であることの有難味をつくづく感じるのである。<sup>36</sup>

幸田は、『和蘭夜話』の末尾にも「自分は海外に留学して、日本の有難さを強く且つ深く感じた一人である。」とくりかえしており<sup>37</sup>。留学体験によって「日本」の「有難味」を知ったというのは、幸田の本音であつたと理解してよい。

すなわち、晩年の幸田成友の主要な研究テーマであつた日欧通交史研究は、洋行で幸田が



体験した各種の経験 — 日本とヨーロッパの文化交流を示す史料の発見、異文化接触 — の延長線上にあったことは間違いない<sup>38</sup>。この点で注目されるのが、「日本人を主人公とした西洋の古い芝居」（1938年）<sup>39</sup>、「日本の文化に及ぼした和蘭の影響」（1937年）<sup>40</sup>などの論稿である。いずれも、西洋と日本の通交の歴史が、16～17世紀頃まで遡るものであり、両者の交流がいかに深いものであったかに注目したものである。

さて、こう考えてくると、幸田成友が、江戸幕府がとっていた「鎖国」をどう理解していたのかが論点となる。これについて、幸田は次のように述べている。

一六三六年は日本暦で寛永十三年に当ります。鎖国令が発布せられた年として有名ですが、その本文を能く読んでみると、鎖国令といふ名称は決して当つてゐない。鎖国またその反対の開国といふ言葉は、外国人に対し、日本の港を鎖すとか開くとかいふ意味です。寛永十三年令は日本人の海外に往くこと及び海外に在留した日本人の帰国を近似、背く者は言かに処すと規定してあるのですから、日本人海外渡航取締令といふべきです。<sup>41</sup>

この記述はあくまで寛永13年（1636）の「鎖国令」に関する指摘であるが、ここで幸田が、国内からの視点と海外からのそれとを明確に分けて理解しているところに注目したい。幸田は、日欧通交史研究を語る際に、日本側の資料からみた事実と、西洋の文献に残る資料とを照らし合わせた記述を行っている<sup>42</sup>。幸田が、一つの事実について双方向の側の史料から考察する視点（史料批判の基本）を重視していたことが確認できる。

しかし、洋行経験のみをもって、幸田の研究が、経済史から日欧通交史へ大きく変化したことを説明できるのだろうか。たしかに、幸田が日欧通交史研究に乗り出した直接的な理由は、洋行のなかで発見した「日本、だったかも知れない。また、日本だけをみても、日本は分からないということを学んだのかも知れない。しかし、それによって研究対象や方針を根本的に変更するまでには、もう何ステップかを要するよう考えられる。両者の間には、やはり断層があると考えられる<sup>43</sup>。この場合、幸田のこの転換が、資料紹介などの部分的な変更ではなく、研究の方向性そのものが変化しているところに注意しなくてはならない。幸田は、『日欧通交史』（1942年）の「序言」で、次のように指摘している。

私共歴史を研究する者は、銘々研究の対象を自分の最も興味を感ずる題目及び年代に取るので、勿論その題目も年代も人によつて相違する。日本歴史の上で、足利氏の末から徳川氏の初期まで、即ち西洋流にいふと十六世紀から十七世紀の初へかけての百余年は、所謂移り変りの時代で、今迄動揺して居つたものが安定する。分裂して居つたものが統一する。箇々の中心が集合して一つの大きな中心を作る。さうしてその原動力は何かといへば実力で、優勝劣敗の事実がまざまざと眼前に展開して行く。然し決して実力ばかりではいけない、その上に更に名義の正しいことの必要が認められ

る。時代としては随分興味あるものと信ずる。

それから日本人が日本人たることを判然認識するのは外国人といふものを明白に認めることが出来る。日本人が古くから能く知つてゐる外国人は朝鮮人と支那人とであつたが、足利氏の末になつて始めて西洋人に会合した。外国人とはいへ自分に類似した朝鮮人支那人のみを見た日本人は、碧眼紅毛の白色人種に相對して一段日本人たる觀念を高めたに相違ない。日本と西洋との交渉を研究することは随分興味あるものと信じます。これは決して我田引水ではありません。<sup>44</sup>

この記述から明らかなように、幸田の日欧通交史研究は、表面上二つの目的をもっていた。一つは、16世紀から17世紀への轉換期 — 「動搖」から「安定」へ、あるいは「分裂」から「統一」へ — に注目すること。そしてもう一つが、「日本人」という觀念が、「外国人」があつてはじめて成り立つものであるということである。この二つの視点は、あわせて考えるべき問題であろう。すなわち、「分裂」から「統一」へ向かう16～17世紀の轉換期に「外国人」と初めて出会った日本人は、「一段日本人たる觀念を高めた」ということに着目することが幸田の研究の中心であつた。この背景には、『日欧通交史』が發表された昭和17年(1942)という時代状況があつたと考えるべきであろう。周知のように、アジア太平洋戦争の前後は、「日本人」「日本精神」などが稱揚された時期である。そのなかで、「日本人」という自覺が、国民の間に生まれてきたのは、いつからか、という問いかけはきわめて重いものである。幸田はこの問いに対して、16～17世紀の「始めて西洋人に会合」つたとき、すなわち「他者」があらわれたときに、はじめて「日本人」という意識が起こつてきたと理解している。幸田のこの指摘も、当時の時代状況を受けてのものであつたことは、明らかであろう。さらにいえば、幸田の研究方針の轉換の真意も、当時の社会状況も念頭においた上で、より複合的にみていく必要がある。日欧通交史研究に関連する幸田の論考は、いずれも1930年代後半に書かれたものである。満州事変以降、國際連盟から脱退し孤立していくことになる日本の状況が、幸田成友にどのような影響を与えたのだろうか。当面、この問題が重要な論点となる。

しかし、幸田の変転は、彼の研究の全容を正確に理解しなくては見えてこない。まずは、幸田の研究の出発点である『大阪市史』の編纂から順を追って、考察していくことにしたい。

## 2.2. 大阪市史編纂事業

幸田成友は東京帝国大学を卒業するとすぐ、明治34年5月21日、大阪市史編纂委員長に任命された(年給は1200円)<sup>45</sup>。まだ若かつた幸田の大阪市史編纂委員への就任は、当時、新聞記事にもなり、社会の関心を集めた。

ちなみに、幸田による自治体史編纂の大きな成果の一つとして、史料集(『大阪編年史』)

の作成を挙げる研究者もいる。たとえば、児玉幸多氏は、「また『大阪市史』を編纂されるために編年式に整理された史料集稿本は、『大阪編年史』として現在刊行中で、多くの研究者に喜ばれているが、これをみても、市史編纂に根柢からの土台を据えてかかられた様子をうかがうことができるわけで、今日いたるところで行われている府県史や市町村史編集の範とすべきものと思われる。」<sup>46</sup>と述べている。周知のように、児玉氏自身も戦後の自治体史編纂に大きな貢献をしていくが、『大阪市史』が、その一つのモデルとなっていたことが読み取れる。また、幸田自身も、「大阪市史の編纂について」（1928年）という論考のなかで「市史といふものは在来日本に例のないものである」とし、「やむを得ず独逸や伊太利の一二の市史を見て一ホンの垣覗をしたゞけ故読むとは申しません一少かるぬ教訓を得た」と述べている<sup>47</sup>。ここで、幸田が市史を編纂する上で、従来の徳川家や水戸藩による歴史書の類、それから江戸時代に編纂された地誌類などを「手本」としていなかったことに注意する必要がある。幸田がめざす「市史」は、従来の幕府編纂物や地誌類とは全く異質のものであった。なお、幸田の編纂した『大阪市史』が、従来とは一線を画す点としてその特徴的な編纂方法が挙げられる。『大阪市史』第1の「編纂の顛末」には、次のようにある。

- 一 編纂の順序は、先づ官庁、公解・社寺・組合・旧家故老を訪ひ、或は書林に囑して材料の蒐集を力め、次に此の如くにして集め得たる材料を取捨し、輕重を區別し、之を年次に系けて大阪編年史料を編纂し、編年史料成るに及び、時代を定め、同種の事項を集めて市史綱目を作り、之によりて市史本文の執筆に著手せり。而も材料の発見は尽くる期無きものなれば、編纂係は常に注意を加へ、之を得る毎に編年史料及市史稿本の修正を怠らざりき。<sup>48</sup>

先に編年史料を編纂し、そこから項目を立て、叙述していく方法は、今日の自治体史の基本的なスタイルといってよい。幸田自身、「『大阪市史』は第一第二が本文で、上古より慶應三年までの市の発展の大要を描き、第三、第四上、第四下には大阪町奉行所で寛永以後御維新までに発布した御触と口達とを発布の順序によつて載せた。」というように、その大きな特徴の一つに、御触口達類を年月日順に体系的に並べた点が挙げられる。これは、きわめて困難をとまなう作業となった。御触口達にこだわった理由について、幸田は次のように述べている。

何故そんなに力瘡を入れて御触を集めたかといふに、自分の考では、之が徳川時代に於ける『大阪市史』の根本となるものと認めたからである。今日では百般の制度が整つてゐる。今日の目で幕府時代の制度を見たら、不整頓を感ずるであらうが、幕府時代はそれで世上を治めることが出来た。幕府時代に大阪を支配してゐたのは東西の町奉行である。<sup>49</sup>

ここから二つのことを確認できる。一つは、『大阪市史』そのものが、委員長である幸田成友の意図のもとで編纂が行われた点。そしてもう一つは、幸田が、大阪町奉行所を政治的中心に沿えた上で、徳川時代（江戸時代）の歴史を描こうとした点である。普通、大阪市のような大規模な自治体においては、地域ごとの歴史を分析的に叙述していく方法や、政治・経済・文化（宗教）などの分野にわけた上で叙述していく方法がとられるが、そうではなく、幸田は、町奉行所の御触口達という政治的・統一的な一本の軸から大阪市の歴史を描こうとしている。これは、幸田は、「地誌、行政、自治制、交通～」などの各部門の叙述をする『品川町史』に対して、「かく部門を立てて記述する方法は、その部門に関する沿革を会得するには甚だ便宜であるが、或る時代の品川宿を知るには甚だ不便である。年代的に重大事件を集め、それに本文の頁数を記入した表を添へられたら、この不便は容易に除かれると思ふ。」と批判していることとも関連している<sup>50</sup>。やはり、編年体方式に強いこだわりがあったことがうかがえる。しかし、今日のように、自治体史の考えが定着していない当時の状況のなかにあって史料を蒐集するのは大変なことであった。とくに、図書館や神社仏閣以外の旧家より古文書を借り出すのが、きわめて労を要したという<sup>51</sup>。そうした困難のなかで、叙述された『大阪市史』は、間違いなくその後の自治体史編纂の模範となるべきものであった<sup>52</sup>。

こうした市史編纂の経験が、後の幸田の研究に決定的な影響を与えたことに注目する研究者もいる。たとえば、橋本増吉氏は、「更に博士（＝幸田成友）が日本の海外貿易、特に足利末期以後の対欧通交貿易に注目され、遂に「日欧通交史」の高著を見るに至ったのも、引いては吾国に於ける初期基督教の伝来に深く興味を覚えるに至ったのも、全く「大阪市史」編纂の副産物と見らるべきものであろう。」と述べる<sup>53</sup>。たしかに、幸田成友は、大阪市史編纂時に収集した資料をもとに、いくつか論考を発表しているし、自身も「この『市史』編纂事業が、端緒となつて、自分の後半生の研究題目を示唆誘導し、先づ江戸時代の日本経済史、次に日欧通交史の研究に自分を没頭せしめたのである。」<sup>54</sup>と述べている。

このなかでも、とくに、『市史』編纂事業の成果を強く受けた幸田の著書が、『大塩平八郎』と『江戸と大阪』であった。両著で元にされているのは、大阪市史編纂時に発見された史料である。とくに、大塩の乱については、『大阪市史』第2のなかにおいてかなり詳しく論じられている。47頁（pp.481～528）にわたって、大塩の乱の顛末が書かれている。「挙兵の決心と準備」から「騒乱」、その「末路」、「乱後の賑給」に至る過程が史料をもとに丹念に叙述されている。しかし、一方、『大阪市史』の段階では、後の日欧通交史研究にみられるような対外交流史の視点は弱い。ペリー来航についてもきわめてオーソドックスな記述にと

どめられている。ちなみに、幸田が『大阪市史』を執筆するに用いた史料については、「大阪市史引用書目 上・下」（一橋大学附属図書館蔵）<sup>55</sup>にまとめられている。ここでは、引用された史料の所在や内容が端的にまとめられている。『大阪市史』の事業が多くの史料を蒐集し、史料の位置づけ（史料批判）が丹念に行われた上で活用されていることが、ここからも知られる。幸田成友は、『大阪市史』の編纂を通じて、多くの史料を蒐集することに成功した。その一端は、同じく一橋大学附属図書館が所蔵している「幸田文庫」のなかからも推察される<sup>56</sup>。

さて、幸田は、『大阪市史』編纂の際の「市史材料」をもとにした「人民文庫」の創設を熱望し、次のような文章を残している。

市史編纂係で数年間に集めた書類は可成ある。その中には保存の必要もない、字引のやうなものもあるが、是等は捨てて、純粹の市史材料は保管の方法と共に利用の方法を講ぜられたい。御大典記念として各地に図書館設立の計画もあるやに聞く。自分も図書館協会の一員として至極賛成である。いづれ大阪市に於ても人民文庫が起るであらう。仮令本年でなくとも、数年の中には屹度起るに違ひない。もしその一室に従来の市史材料を蔵し、更に進んで新材料を集めるとしたならば、自分にとって満悦であるのみならず、従来の大阪市民は必ず現在の大阪市民に対して、忘るべからざる感謝の念を払ふことと確信する。<sup>57</sup>

このように、『大阪市史』編纂で使用した史料を、大阪市民に有効に活用してもらうことを幸田が強く希望していたことが分かる。では、こうした自治体史編纂の経験が、後の彼の研究にどうつながってくるのだろうか。以下でみていくことにしたい。

### 2.3. 経済史研究

さて、2.2. で述べてきたように、『大阪市史』の編纂を終えた幸田成友は、そこで得られた史料をもとに、日本経済史の研究に邁進していったとされる。本節では、とくに『日本経済史研究』（1928年）と『江戸と大阪』（1934年）に注目し、幸田の経済史研究の意味を考えてみよう。まず、『日本経済史研究』について考察する。項目は下記のようになっている。

米切手／札差／札差雑考／質屋／富札／髪結床／天保改革の一節／株仲間の解放／御買米及御用金／武士と町人／天保人別改令／非人寄場／弾左衛門の生計／江戸の名主／徳川時代の大阪市制／日本経済史上の大阪

この項目を通覧しただけで、幸田の『日本経済史研究』が、個別事例の累積によってまとめられていることが分かる。とくに、「札差雑考」は、昭和3年（1928）に発表された三つの論考より構成されている。内容は、当時の東京商科大学附属図書館所蔵の札差史料を中心とした具体的な検証となっている。なぜ、幸田が、札差を研究の対象としたかは、次の文章より明らかになる。

札差の取扱ふ米高は、蔵屋敷で売出す米高の四分ノ一内外に過ぎずとも、掛屋が経済上に於て大名の死命を制したやうに、札差も亦小給而も多人数の旗本御家人の死命を制し得たのであるから、幕府時代の経済史の研究には、優に一項目とするに足りるものである。ただ両者の相違は、掛屋に関しては個々について研究せねばならぬ難儀があるが、札差の分はさうでない。それにも拘らず、明治二十三年の『江戸会誌』第二冊三、四、六及び八に横井時冬氏の「札差考」が載つてゐる外、他に発表せられた論文を見ぬのは遺憾である。<sup>58</sup>

なお、幸田の『日本経済史研究』について、三田村鳶魚は、「…札差の業務の大概さへ世間では知って居ない。横井時冬氏が札差考を発表してから、モウ三十余年になるのに、それはそれッ放しでその後何の講明もされて居ない。今この書によって札差、札差雑考の二篇を読めば、何程研究が進展して居るか、説示が詳密になって居るか知られる。」などと、幸田の研究を高く評価している<sup>59</sup>。さらに、三田村は、次のようにも指摘する。

大小二三の日本経済史なるものを見て、理論が豊富で史実が希薄なのに驚いた。別けて江戸時代に入っては、他の時代よりも資料が多いのに、依然としてしるの實のやうな体裁をして居る。…（中略）…日本経済史には限らぬ、文学史にしても、二千有余年の長丁場を、如何なる精力の人にもせよ、独力で負担されようとは思へない。こゝが一般の学者が請負根性を丸だしにして、しるの實のやうな史実をボツチりにこしらへ上げざるを得ない根本なのだらう。異人さんの方から仕入の便利がある理論は、勝手づくでフンダンにありもしやうけれども、一々史実に当るとなると、それがあいにく自分の国のだけに、輸入する訳に往かない。であるからまづ資料の自足自給を企図しなければならぬ。従来我等はこの労作を久しく切望して居た。

その願望をきっと果してくれると思つて居た人の一個は、たれでもない、幸田成友君なのであった。

三田村のこの指摘が昭和3年（1928）のものであることを考えると、「大小二三の日本経済史」が指しているのは、福田徳三の『日本経済史論』（1907年）、竹越与三郎の『日本経済史』（1920年）などのことであろう。この頃になると、在野の史家たちによるアカデミズム史学への批判が高まりをみせた。こうしたなかにおいて、幸田の歴史研究が、特別視されていたことがわかる。そしてその理由は、史料を丹念に紹介していくその実証主義的なスタンスにあった。三田村の記述は、それを物語っている。『大阪市史』において一次資料の蒐

集に尽力した幸田は、こうした批判から基本的には免れる位置にあったといえるであろう。

さて、幸田の『日本経済史研究』（1928年）は、徳川時代の経済史を中心に総合的に分析した論著であるが、たとえば、幕府の御用金について分析するなかで、幕府が大政奉還し、城内市中が「混雑動揺の頂上」のなかにあつて、「幕府が信義を守つて御用金の年譜額を支拂つたことは、今迄知られなかつた美事で、それを発見したことを自分は甚だ愉快に感じます。」<sup>60</sup>と述べたり、徳川時代の身分制について論じるなかで、「武士」と「町人」を比較検証したり、「武家は経済上町人に頭を屈したが、武家の最も尚ぶところの忠義の気風は町人を征服した。」<sup>61</sup>とするなど、士族の出身であつた幸田の考えが見え隠れする箇所もある。

しかし、『日本経済史研究』自体は、全体として大阪市史編纂の過程で得られた知見が反映していると考えられる。とくに、最後の「日本経済史上の大阪」は、「大大阪記念講演」をもとに刊行された『大阪文化史』（1925年）を初出とするものであるが、次のように述べている。

大阪と申しますれば昨晩も申上げました通り、「町人の都」といふことは、誰もが申すことであります。大阪は「天下の台所」日本全般の台所であつて、日本で消費するところのものを大阪が一手で引受けて居るといふ言葉を、徳川時代にはよく申して居つたので御座います。この「天下の台所」についてお話をする訳ですが、便宜上最初に大阪が武家に対しましてどういじ風に、言ひ換へますならば大阪の町人が武家に対してどういふ態度を執つてみたかといふことを申述べたい。元来武士と申しますれば、士・農・工・商の四階級の一番上位に置かれて居るものでありまして、その士が一番下位に置かれて居るところの商人に対して頭が上らなかつたといふこと、詰り大阪の町人に対しては立派な大名が頭が上らなかつた、即ち下手に手を組んで来なければ総ての話が纏まらなかつたといふ謂れをお話し致したい。次には大阪の町人が江戸の町人に対して毎時も貸方になつて居たこと、江戸の町人は大阪の町人に対して借金をして居つたといふことを、それから最後に大阪の富の実力、富の程度がどれ位のものであつたかといふことを、数字を挙げてお話し致して見たいと思ひます。<sup>62</sup>

この文章から幸田成友が徳川時代の「大阪」をどのように理解していたのかが知られる。ちなみに『江戸と大阪』（1934年）の序言には、『江戸と大阪』は、自分が商科大学に於ける最初の講義であり、また最後の講義である。大正十三年度に一回講演したまゝで二度と繰返したことは無い。<sup>63</sup>とあり、『江戸と大阪』の内容が、大正13年（1924）に成つたものであることが確認できる（ちなみに、一橋大学附属図書館には、幸田成友の「江戸と大阪」についての講義録も残されている<sup>64</sup>）。1920年代、幸田は日本経済史研究、とくに江戸と大阪の都市比較史的研究を進めていたことがわかる。

さて、『日本経済史研究』のなかでは顕著でないが、幸田が明治期より西洋側からの視点

を重視していた。たとえば、明治40年(1907)3月の大阪高等商業学校における講演「豊臣時代の大阪」のなかで、大阪城築城の様子をあらわした、ムルドックの記述を紹介している<sup>65</sup>。関東大震災の際、東京商科大学で火災にあい焼失してしまったが、幸田がかなり前から日本関係の西洋の文献を買い集めていたことが分かる。

実際、幸田は、当初から世界史(日欧通交史)に対する関心があった。幸田の初期の著作である『暦残大王』(1900年)<sup>66</sup>や『西洋史講義』<sup>67</sup>が示すように、幸田の歴史研究の出発点は、むしろ日本経済史ではなく、西洋史におかれていた。しかし、それにもかかわらず、1910～20年代、幸田が日本経済史研究へと進んでいった理由は二つ考えられる。

一つは、大阪市史編纂のなかで、商業都市・経済都市である大阪という地域の性格から経済史研究へと必然的に流れていったという点である。「天下の台所」という大阪という地域の特徴から、経済の流れや交通を丹念に明らかにする必要に迫られたのであろう。

もう一つの理由は、幸田の歴史観そのものにかかわる問題である。結論を先に述べてしまうと、初期の幸田は、明治維新による日本社会の変化に大きな問題関心を置いていた。すなわち、江戸時代から明治時代への社会の転換をどう理解するかが、幸田にとって大きな関心であったと考えられる。明治初年生まれで、しかも士族であった幸田にとって、江戸時代はそれほど遠い昔ではなかった。なぜ、徳川幕府が崩壊し、明治という新しい時代が到来したのか、それは身に迫った課題であったであろう。その点もふまえ、次節では歴史研究の変転について考察していくことにする。

### 3. 歴史研究の変転 — 経済史研究から日欧通交史研究へ —

#### 3.1. 幸田成友における西洋史研究 — 「日本」と「西洋」 —

幸田成友の研究活動のなかで見逃してはならないのは、ロバート・マッケンジー著『十九世紀史』を翻訳している点であろう。同書は、題名の通り、十九世紀の欧州の歴史を概説したものであるが、1873年生まれである幸田成友にとってこれはほとんど同時代史であった。同書の翻訳をおこなった理由について、幸田は「緒言」で次のように述べている。

ウィリヤム、スタップス氏がオクスフォード大学の史学教授に挙げらるゝや、其就職演説に述べて云く「近世史研究を以て古代史研究と比較し来たれば、一は生の研究にして他は死の研究の如し、一は生存物体の観察にして他は體骨の観察の如し」と。近世史研究の趣味あることを斯の如し。就中十九世紀史は最も変化に富み、従て最も興味あり。<sup>68</sup>



この文章にある「十九世紀史は最も変化に富み」というのは、欧州だけにとどまらず、江戸から明治へと転換していった日本も含意していると考えてよいだろう。ここから、幸田が、国際的な視野から日本の19世紀を考えようとしていたことが推察される。すなわち、西洋の19世紀を理解した上で、日本の19世紀すなわち徳川幕府の崩壊と明治新政府の樹立を考えようという戦略があったように考えられる。

しかしながら、『日欧通交史』（1942年）の序文冒頭には、次のように記されている。

私共歴史を研究する者は、銘々研究の対象を自分の最も興味を感じる題目及び年代に取るので、勿論その題目も年代も人によって相違する。日本歴史の上で、足利氏の末から徳川氏の初期まで、即ち西洋流にいふと十六世紀から十七世紀の初へかけての百余年は、所謂移り変りの時代で、今迄動揺して居ったものが安定する。分裂して居ったものが統一する。箇々の中心が集合して一つの大きな中心を作る。さうしてその原動力は何かといへば実力で、優勝劣敗の事態がまざまざと眼前に展開して行く。然し決して実力ばかりではいけない、その上に更に名義の正しいことの必要が認められる。時代としては随分興味あるものと信じます。

すなわち、この時点で幸田の関心は、19世紀から17世紀へとシフトしていたことが分かる。19世紀、すなわち維新时期に強い関心をもっていた頃の幸田の著作として注目すべき論考の一つに、「維新前と維新後」がある。これは、昭和10年（1935）7月9日・10日の2日間にわたって「慶応義塾商業学校第三回課外講義」の内容をもとにしたものである。構成は、次のようになっている。

緒言一 過去と現在

- 一 明治六年以前の「時」／二 太陰暦と太陽暦／三 年号の昔と今

緒言二 自他の区別

- 一 日本の名称／二 「日の丸」の話／三 苗字に就て

第一 維新以前

- 一 昔の階級／二 武家の制度及精神／三 城と市街／四 武家の所領／五 武家の困窮／六 町人の擡頭／七 町人の主従関係／八 仲間（組）の発達

第二 維新以後

- 一 版籍奉還と廃藩置県／二 家禄／三 徴兵令／四 学制・服制・風俗／五 交通の発達／六 貨幣條例／七 銀行條例／八 工業の勃興／

緒言 吾人の覚悟

とくに、「維新前と維新後」で、身分の垣根が取り払われ、「個人」が努力次第で活躍できる時代になったことを強調している点が注目される。幸田は、この講演の最後を、次のような言葉で締めくくっている。

さて今日の日本はどうか。一番最初の日本は可愛いもの、富士山と芸者ガールと云って外国から可愛がられみた。今は中々さうでない。日本は中々恐ろしい国だ、恐ろ

しい国が出しやばつて来たと言つて、なかなか日本を可愛がつては呉れません。皆さん方は寔に明治以後の幸せな世、自分の腕一本で出世が出来る時代に生れて来られた。私の父親の時代には幾ら勉強してもどうにもならない時代であつたが今日は決してそんな時代ではありません。

然し又その間、昔にはない競争と云ふものが出て来ませう。日本は人口が非常に殖える国でありまして、私共学生時代には三千五百萬と云つて居りましたが、今日は内地だけでも六千萬以上にはなつてゐるでせう。今日は産めよ殖えよの時代ですから人口は益々増して来る。そしてその人々もその儘で済まない。なんかやつて先輩の人を助けその次に続々出て来る人に譲つて行かなければなりません。

貴君方は一方から云へば、良い事があると同時につらい事が起つて来るかも知れない。然しこれは日本人である以上は逃げられない。敢然と押切つて行くと云ふ覚悟を持つてやつて行かれる事を望みます。<sup>69</sup>

この文章では、「競争」が一つのキーワードとなっている。ここでは、国内での個人の成長にともない発生する「競争」が論じられているが、日本と海外における「競争」も含意されていると考えるべきであろう。実際、この講演がおこなわれた頃の日本は、国際連盟から脱退し、孤立を深めていく時期でもあつた。幸田の念頭には、こうした時代状況の変化もあつたであろう。なお、ここで幸田が、「つらい事が起つて」も「日本人である以上は逃げられない」と述べている。「明治人」であつた幸田成友にとって、明治という社会がどのようなものだったのか、垣間見える記述である。

さて、幸田は、昭和5年(1930)12月の国史回顧会での講演をもとに出版された『聖フランシスコ・ザビエー小傳』の冒頭で次のように述べている。

…耶蘇教が日本に伝はりましたことは、日本の歴史の上で重大事件の一つで、之については誰方も御異論無いことと思ひます。私自身は日本の歴史、殊に經濟の方面から日本歴史お研究いたして居ります者で、その私が宗教の御話を致しますのは、誠に縁遠い様でございますが、日本の古い時代の外国貿易、葡萄牙人や西班牙人を相手に商売を致しました時代を調べますと、何うしても耶蘇教といふものが其処へ入つて来るのでございます。当時の葡萄牙人、西班牙人は非常に耶蘇教に熱心でございまして、耶蘇教の教師と商人とは何時も一体で、離すべからざるものでありました。秀吉や家康は商売の利は欲したが、耶蘇教の輸入は好まない。商売と宗教とを二つに分けたいと非常に苦勞をしましたが、遂に之を分けることが出来なかつた。従つて私の本職は經濟史でありながら、多少なりとも耶蘇教の歴史を見ねばならぬ羽目に陥りました。

<sup>70</sup>

この文章から、經濟史を「本職」とする幸田の関心が、宗教史の方面へとシフトしていく過程が読み取れる。ザビエル研究もそうであるが、日欧通交史の研究は、史料の性格からして、とくに主体に着目するものが多くなつた。これによって、經濟史から外れた領域(社会史)へと領域を広げていく必然性があつたのだろう。

幸田の日欧通交史研究は、次の三つのタイプの主体の動きに注目したものであつた。

- ①日欧通交史において重要となる人物（ザビエル、三浦按針、小西行長、遣欧使節団等）に関する研究
- ②「日本」について記した西洋人についての研究<sup>71</sup>
- ③日本人留学生についての研究

幸田が日欧通交史研究のなかでとくに注目したのは、時代としては17世紀<sup>72</sup>、主体としては、日本を論じた西洋人たちの姿であった。この点、幸田が、『和蘭雑話』のなかで、「古今を問はず外国へ出て働く人は、学者にせよ、商人にせよ、外交官にせよ、行先地の言語に充分精通し、さうしてその国に関する著述を残すやうに心掛けねばならぬと、自分は平素固く信じてみます。」<sup>73</sup>と述べていることも注目される。日本と西洋の両方の史料を閲覧し、調査研究してきた幸田成友にとって、①～③の主体は、自分自身とも重なりあうものであった。

では、本節で明らかにした点をまとめておこう。幸田成友による歴史研究の背景に、「日本の近代化をどう評価し、歴史のなかに位置づけるべきか」という課題があった。このなかで注意しなければならないのは、幸田が、近代⇨「個人」が活躍する時代だと認識していることである。理論的には、スペンサーの社会進化論などに近いが<sup>74</sup>、「競争」というキーワードからは、当時の国際状況のなかにおける日本の立ち位置が暗示されているように考えられる。そのなかで、16世紀から17世紀を中心に、日欧の間に立って活躍してきた主体は、幸田にとって研究しなければならない対象であったのだろう。

そう考えてくると、幸田の日欧通交史研究は、経済史研究からの延長（これは幸田自身も述べている）という側面だけではなく、十五年戦争にみられる国際情勢の変転がより大きく作用しているようにも思われる。しかしこの点に注目する前に、幸田の歴史叙述のなかで主体がどのような位置にあったのか、時系列をふくめて理論化しておく必要がある。次節で確認していきたい。

### 3.2. 幸田成友における「個人」の意味 — 『大塩平八郎』から『日欧通交史』へ —

さて、幸田成友の歴史研究が、当時の国際情勢を背景として進められてきた可能性について触れたが、次に歴史叙述の方法論の観点からこの点について具体的に考えてみたい。まずは、西垣氏が注目した幸田の「個人」の扱い方について考察していくことにしよう。

まず、明治34年（1901）、『江湖文学』に掲載された論文「保科正之」<sup>75</sup>が注目される。周知のように、保科正之とは、徳川家康の孫にあたる人物で、会津藩の初代藩主となった「名

君」の一人である。なぜ、幸田は、保科正之に注目したのだろうか。まず、幸田は、保科正之が活躍する家綱政権期を次のようにとらえていた。

三代将軍の晩年より四代将軍の初年に至るの時代は、まさに創業時代中の守成期より、純然たる守成時代に移らんとする所謂過度の時期なり。当時天下の諸侯は外様と譜第とを問はず、泰平華奢の風に伴て概ねその元気を鎖磨し去り、復た昨日の如く脾肉を撫して乱を思ふの輩なかりき。然れども志を当世に得ざる浮浪の徒の、都下に集注してその志を達せんとする者頗る多く、加之家綱の将軍職を継げるも年僅に十一、真に主幼にして国危しの観ありしなり。幕議将軍の喪を秘せんとし、又流言を禁ぜしを以て見るも、当時の形勢を推知するに足らん。<sup>76</sup>

こうした時代のなかで、将軍家綱を補佐した人物こそが保科正之であった。幸田は、「将軍の補佐」として忠実に職務を全うし、「諸侯」として会津家の確立を進めた保科の生涯を、学問の奨励なども含めて丁寧に紹介する。そして、この論考の末尾では、保科正之が作成した「家訓」を紹介し、次のように締めくくる。

…会津藩家の眼中にはただ宗家あるのみ、宗家の外には他に尽すべきの君主を見ず、之と盛衰存亡を共にするはその期する所たり。幕府の末路に当り、会津家の断然この主義を保持し、蕞爾たる一小城に據守して能く天下の大軍に抗し、幕府と盛衰存亡を共にしてまた勢の不可なるを顧みざりしもの豈にこの家訓第一條に基因したるに非ざる無きを得んや。<sup>77</sup>

この文章から明らかなように、幸田が保科正之を歴史叙述上の主体として取り上げた背景には、単に幕府の「守成期」を支えた主体としての評価だけではなく、維新时期まで明確にのこる会津藩の佐幕主義の背景をも考察する意図があったことが知られる。すなわち、同時代の主体における活躍とともに、その主体が家訓を通じて、後の時代に影響を与えたことに注目している。大阪市史編纂に携わる前から、幸田が主体を中心に据えた歴史叙述の一つのスタイルを確立していたことが確認できる。

次に注目すべきなのは、1910年に刊行された『大塩平八郎』である<sup>78</sup>。同書については、明治の文豪森鷗外の小説『大塩平八郎』のベースになったものである<sup>79</sup>。大塩平八郎は、当時の幕府に対してクーデターを仕掛けた革命家であった。幸田が『大塩平八郎』を刊行した1910年であり、まさに、大逆事件が起き、国家による社会運動の統制が厳しくなった時期である。大逆事件は、多くの知識人に衝撃を与えることになったが、とくに森鷗外は、強い批判を展開した。この時代状況にあって、幸田が大塩平八郎をもって論じたかったことは何だろうか。次の文章に注目したい。

良吏として又学者として令名のあつた平八郎後素は、乱魁の二字を以てその一生を終

はるに至った。彼は利を見て肯へて進まず、害を見て肯へて退かず、功を同じうすれば則ち之を人に帰し、過を同じうすれば則ち之を己に受くといふ覚悟を以て、吏務に精励した。然し彼の為した所はその職掌に因るとはいへ、常に秋霜烈日の如くで、絶えて春風駘蕩たる所がない。彼は在職中既に帷を垂れて生徒を教授したが、退職後愈々経籍を研して生徒に授け、学んで厭はず、人に誨へて倦まず、また再び世に用ひられんことを欲し無かつた。然し世間は常に彼の眼底に映じ、国家の利害人民の休戚は、常に彼の胸中を往来した。…(中略)…此の如き経歴と此の如き意志とを有せる巨人をして、一朝同志を語らひ、白刃長槍を携へ、火を放ち銃を發し、市街を横行して「乱魁」の汚名を被むるに至らしめたは抑も何であるか。<sup>80</sup>

この文章から分かるように、大塩平八郎に対する幸田の評価は、低くない。「巨人」であった大塩平八郎に「乱魁」のレッテルを貼らせるような事件を引き起こさせたものは何だったのか、そこが幸田の明らかにしたかった点である。その背景にある経済・政治の乱れこそ、幸田が解明したかったところであった。

幸田が「大塩平八郎」などの歴史上の「個人」を歴史叙述の上に載せる理由の背景には、近代⇄「個人」が活躍する社会と認識していたことがあったと考えてよい。それは、基本的には、日本経済史の文脈でも、日欧通交史の文脈でも同じである。先にみたように、徳川時代の経済構造に対する幸田の分析は、維新前後による社会構造の転換を念頭においたものであったとみられるが、1930年以降の日欧通交史研究との間には、どのような論理的な連続性があったのだろうか。その点を考える上で注目すべき文章が、「続福澤全集第一巻を読む」(1933年)の以下の文章である。

明治以前と明治以後とは画然分離されたやうに見える。一切の文物悉く新に西洋から輸入されたやうに見える。大部分においてそれは事実であらうが、一切において然りといふ議論は立たない。明治史を研究する者は、問題の何たるを問はず、須らく明治以前との連絡如何に注意すべきであらう。然し幕末から明治に跨つて生存した人人は、自然幕末及び明治に得た知識体験によつて、明治の新事物に対する便宜を有した。先生が明治の新事物を解釈するに際し、明治以前の事物と比較せられた点は殊に得難い記事で、我等はそこに多くの学ぶべきものを見る。<sup>81</sup>

この文章から明らかなように、幸田は「明治に跨つて生存した人人」の存在を重視していた。先にみてきたように、幸田にとって、明治維新は社会のシステムを一変する大きな変革期ではあったが、その一方で二つの時代の連続性も認めていた。明治以降、一切の文物が西洋から新しく「輸入」されたやうに見えるが、決してそれだけではなく、維新以前の「徳川時代」から引き継がれてきたものも多い。その点に注目することが、幸田の日本経済史研究の主眼であったとみられる。そう考えた場合、維新前後を生きた主体に注目することが必然的に重要となってくる。ここに、幸田の歴史叙述を「個人」(主体)中心のものにした大き

な要因があった。

日欧通交史研究は、先述したように16世紀～17世紀に日本と西洋を股にかけて活躍した日本人や西洋人に注目したものである。とくに『日欧通交史』のなかでは、豊臣秀吉の時代から十七世紀前半にかけて活躍した人びとが詳しく検証されている。記述の主軸は、あくまで貿易史であるが、日欧の様々な人びとが紹介されているところに同書の特徴がある。

本書のなかでは、キリスト教の弾圧や日本人町の発展など外交史上の重大事件が叙述されているものの、そこに当時の日本政府に対する批判や現況の社会に対する批評の影はみえない。ただ「第二十三章 日本人の海外発展」において、「日本人の気質は進取的であつて退嬰的でない、自動的であつて多動的でない。」と述べてつ<sup>82</sup>、17世紀の日本の海外進出が、幕府の禁令によって僕からの後継者が皆無となり、また「出産による純粋日本人の人口増加は殆ど絶望」的となったことにより、次第に衰えをみせてくる。「此の如き内外の原因によつて過去に於ける日本人の海外発展は衰滅に帰したのである。」<sup>83</sup>という同書末尾の言葉は重い。本書は、全体としては、貿易の面での16～17世紀の国際関係の飛躍的な進展が丹念に研究されていると同時に、島原の乱など耶蘇教にまつわる様々な悲劇も描かれている。もちろん、直接的な表現は見当たらないが、こうした叙述の背景に、国際連盟から脱退し孤立を深め、ついには日米開戦に踏み切った当時の日本に対する幸田なりの問題関心が介在していたのであろう。幸田は、戦時下において日欧通交に貢献した個人（主体）を取り上げ、その活躍を実証することによって、間接的に現実社会を批評しようとしたとみられる。幸田にとって、16世紀から17世紀にかけての国際情勢は、今日と密接にリンクする対象であったのだろう。

こう考えてみると、幸田の歴史叙述が、常に現代社会に対峙したものであった可能性がみえてくる。個人の役割が台頭し「競争」が激化してくる社会のなかで、どう生きるべきか、そうした視点が「日欧通交史」の一連の研究のなかにも色濃く反映していると考えられよう。なお、幸田成友の『日欧通交史』に対する批評として、もっとも注目すべきは、東京商科大学助手の及川完氏による次の指摘である。

最近の我歴史学界に於ける一つの顕著な動向として我国と外国との交渉の問題、我国人の海外発展の問題に関して多数の著書、論文が発表されて居る事実は何人も注目する処であらう。殊に大東亜戦争の勃発する前後から一般の注意が所謂大東亜諸地域に向けられるに及び、其等諸地域と我国との、従つて又其等の諸地域に勢力を占め来つた諸国と我国との歴史的交渉が愈々注目せられることとなり、学界に於ける右の傾向も愈々強められる情勢にあると言はねばならない。処で一般時勢の要求が強ければ強いだけに之に依へる歴史家の労作は一層地味堅実なることを要するは言を俟たない処

で、時勢は飽く迄本をたゞし広く見深く究めて押し進められる論述をこそ歴史研究者に要求するのである。幸田先生の「日欧通交史」を読んで第一に感ずることは、常に倦むことなき先生の学問精進とその方法の厳格精密なることであり、その業績を通じて我々は一層今日学界に奉公する者の任務が如何にあるべきかを教へられるのである。<sup>84</sup>

及川氏の指摘は、幸田が『日欧通交史』を刊行した時期のアカデミズムの風潮を的確にあらわしている。いうまでもなく、この時期は、及川氏の指摘する「地味堅実なる」「歴史家の労作」とは、正反対の歴史書が多数発表されていた。すなわち、幸田の研究は、「厳格精密」さによって、これとは一線を画すという。実際、幸田自身が『日欧通交史』を執筆した問題意識の一つに、こうした学界の状況もあったのであろう。

なお、幸田は、歴史学の役割とは何かという問題についても指摘している。「史実の誤解と曲解」（1941年）において、次のように述べている。

歴史を学ぶ我々は、史実を正当に解釈するを以て任務とし、誤解や曲解に陥らぬやう常に注意してゐるが、思掛けぬ方面から、而も社会に高い位置を占めて居られる方々から、往々史実の誤解や曲解を聞くは堪へ難いことである。誤解は畢竟咀嚼力の不足に起因するのだからまだ恕すべきだが、曲解は正当な解釈を施すべき力がありながら、或目的を達成するには便宜あるやう曲解するのだから、飽くまでその非を責めざるを得ない。<sup>85</sup>

これは、ある研究者の五人組帳の解釈に対する批判として述べられた文章であるが、当時のアカデミズム全体の風潮に対する批判とも理解できよう。また、敗戦直後に雑誌『苦楽』に掲載された「嘘か實か」（1947年）においても、次のように述べている。

凡そ歴史家は過去の事実の真相を研究し、その研究の結果を記述する。記述が肯定的であつても、否定的であつても、亦時には疑問的であつても、彼は常に真実と信じた所を語る。研究が不十分で後の学者から誤謬を指摘せられることがあるとしても、最初彼が語つた時は、飽くまでそれを真実と信じてゐたのである。歴史家ほど正直ものはない。重野博士は児島高德の存在を疑ひ、正直に自己の意見を發表したに過ぎない。自分は歴史家と言はれる程のものではない。然し歴史を学ぶ上は力めて真実を語りたいと平素覚悟してゐる。<sup>86</sup>

このように、1940年代になって、「歴史家」の資質・態度を問う文章を寄稿するようになった背景には、幸田なりの当時のアカデミズムの風潮に対する全体的な批判が込められていたと考えてよいだろう。

さて、“近代日本における個人とは何か”という大きなテーマは、明治・大正期のアカデミズムのなかでは主要なものの一つであったが、歴史学者たちの間では総じてこうした問題関心は薄かった。それは当時の歴史学者たちが、西洋と日本の共通性を論じる際に、西洋

社会の枠組みをもって、日本史を考証しようというスタンスをとったからにはほかならない。しかし、幸田は、大阪市史で培った史料編集の実績、日本経済史研究で養成した徳川時代の経済構造・貿易政策の実態的な把握を武器に、日欧通交史研究に乗り出した。盤石な基盤のもとに構成されたその内容は、戦時下という緊張関係の影響をもろに受けるテーマではあったが、学問としての実証性をともなう成果として、今日の評価に耐えうる作品となった。

H. チースリクは、幸田について次のように述べている。

もう一つ、幸田先生に会った時に感じたことは、その視野の広いことであった。その点で明治時代に外国へ留学した多くの学者に見られる真のヒューマニズムが顕われていた。日本の古来の伝統を意識しそれを堅く守ろうと努力していた反面、西洋の文化と学問をも深く理解し、それを適切に東洋思想ないし日本の伝統と調和させようとしていた。それで幸田先生は二つの極端をまぬがれ、固い国粹主義者でもなければ無分別に外国を模倣することもなかった。先生の人格にはヒューマニズムの大学理念であった *Universalitas* が見事に実現されていた。したがって、一方的な専門家の視野の狭さをもまぬがれ、間違った価値判断におちいるおそれもなかった。<sup>87</sup>

たしかに幸田は「固い国粹主義者」や「無分別に外国を模倣することもなかった」。幸田にナショナリストとしての側面がまったくなかったわけではない。むしろ、「日本人」「日本」に対する深い愛着は、彼の歴史研究の基盤でもある。経済史・貿易史を出発点とした彼が、日欧通交史のなかで最も興味深い、16世紀からのおよそ100年間、各方面で活躍した個々の主体に着目したことは、必然であったと考えられる。増田四郎氏の述懐によれば、幸田は自身の日欧通交史研究について次のように述べていたという。

しかしこの書物（＝『日欧通交史』）について思い出されるのは、博士はつねづね「自分の外国研究はもっぱら日本本位のもので、外国人といっても、直接日本と交渉をもった人だけしか調べなかったが、もっと本格的には、これはやはり当時のヨーロッパ諸国の情勢、つまりオランダとかスペインとかイギリスといった国々の、社会経済史全体のうごきを調べて、それとの関連で、日本とヨーロッパとの交渉を位置づけるのでなければいけない」といっておられたことである。<sup>88</sup>

ここに幸田の研究姿勢がよく示されているが、むしろ、幸田の日欧通交史研究は、人物を中心とした歴史叙述であったところに大きな特徴があったといえる。その主体へのこだわりが、幸田の歴史研究をその時代背景への分析へと向かわせたのである。この点については、日本経済史研究と日欧通交史研究との間に、本質的な相違はなかったといえるだろう。



### 3.3. 「文明史家」としての幸田成友 — 東京商科大学時代の幸田成友 —

さて、最後に、幸田成友の歴史観の形成にあたっては、彼の担った教員としての職務との関連について把握しておく必要があるだろう。幸田は『大阪市史』編纂後、大学教員として多くの後進を育てている。ここでは彼らの回顧録などをもとに、幸田の行った教育について考察していくことにしたい。

まず、幸田は講義の準備に大変熱心に取り組んだことで知られる。それは、『江戸と大坂』『日欧通交史』などの幸田の代表作が、東京商科大学における講義案をもとにしたものであったことから確認できる。こうした教育への厳しい態度に背景には、幸田の師であるリースの影響が強かった<sup>89</sup>。この点、林基氏は次のように述懐している。

しかし、とにかくリースの講義は英語でやるわけだから、全然わからないというわけです。それで、事前に先生のところに行って、講義の要綱を書いてもらって、それを印刷して学生に配る。それを幸田先生がやるのです。それで、いかにリースがそういう原稿をつくるのに苦勞しているか、三回も四回も原稿を書き直している、期日にぎりぎりにならなければそれがもらえない。それを何度も何度も通う。それで教師というのはどんなふうに講義の準備をしなくちゃならないのかというようなことをたたき込まれたのです。それで、僕らが慶應で習った時代の幸田先生もそれを守るわけですな。それだけ大先生になっていたって、前の日にうっかり行ったら、どやしつけられるわけです。どんないいお客さんが来ても、きょうは勉強がありますからお帰りください。そういうふうにして、何回もやっている講義を、何十回となく全部調べ直す。そうしなければ講義に出てこない。<sup>90</sup>

こうしたエピソードからも知られるように、幸田成友にとって、大学での講義は重要であった。当時、幸田は「日本経済史」を主務とし、予科で「西洋史」を担当した。日本史系の教員としては、予科教授の川上多助がいた。川上が「日本法制史」「日本史」を講義し、幸田が「日本経済史」「西洋史」を講義する体制が、次第に確立していった。幸田が退職した東京産業大学時代以降は、川上多助が「日本経済史」を一時引き継いでいる。

ここでは、東京商科大学（予科）において、幸田成友が「西洋史」の担当教員として講義を行っていたことに注目したい。すなわち、幸田の日欧通交史研究は、東京商科大学で「西洋史」の授業を行うなかで、研鑽されてきたものであると考えられる。幸田は、予科教授として就任した大正11年（1922）の段階では、「歴史」という授業を担当していたが、その翌年には「西洋史」と変更し、以後これを踏襲している。授業の内容を伝える講義ノート（受講ノート）が残存してなく、その概要を知ることはできないが、内容は日欧通交史を意識した「西洋史」研究であったとみてよいだろう。

なお、大正12年～14年にかけて、東京商科大学は、当時から著名な日本史家であった三

浦周行、小野武夫、瀧川政次郎外部講師を招くなどして、歴史系科目の充実に積極的であった（p.46の表を参照のこと）。こうしたなかで、最も中心的な位置にあったのが、「文明史」を担当していた三浦新七であった。三浦の「文明史」の講義は、その後、村松恒一郎に引き継がれ、一つの系譜として位置づけられていく。本稿ではその詳細の検討は避けるが、幸田成友の日欧通交史研究も、三浦・村松が進める「文明史」の概念に近いものがあつたと考えられる。それは、幸田の弟子であつた増田四郎が「文明史」を引き継いだことから知られる点であろう。

幸田は、東京商科大学において、本科で「日本経済史」、予科では「西洋史」を講義した（村松恒一郎や三浦新七も同じく予科で「西洋史」を教えていた）。戦時下において、川上多助の「日本史」「東洋史」は「国史」と変更されるが、幸田の「西洋史」「西洋歴史」は変わらなかった。

また、東京商科大学が「外交史」の講義をはやくから開講していたことも注目される（表を参照のこと）。政治家であり慶応義塾の塾長もつとめた林毅陸（1872-1950）、日米両国で活躍したジャーナリスト米田實（1878-1948）、国際政治学の権威であつた神川彦松（1889-1988）など、外交問題の権威が「外交史」の講義を担当している。東京商科大学がいかに「外交史」を重要視していたかが知られる。

このように、全体的な傾向として、当時の東京商科大学では、幸田にとって日欧通交史研究に取り組みやすい環境が整備されていたと理解できる。留学が許可されたのは、そのためであろう<sup>91</sup>。では、具体的に、幸田は、東京商科大学に対してどのような考え方をもっていたのだろうか。幸田自体は、商科大学について、『朝日新聞』に連載された論考「土魂商才」（1941年）のなかで次のように述べている。

王政復古以後藩士藩臣といふ小さな主従関係は絶たれ、兵役の義務は人民一般の負担する所となり、武士の特権たる世禄制も明治九年金禄公債証書の発行により姿を隠すに至つた。武士と深甚の関係にある商人階級の変転も亦この際著しいものがあつた。その中特に今いはんと欲するは商業教育の一事である。維新前商人の修業といへば丁稚奉公より外になかつた。簡単な読書、算盤を同じ店の先輩かあら教はるだけで、それ以上深入さしては却て商人になるに邪魔とまでいはれた。然し幕末に外国貿易が始まり、殊に明治政府がそれを奨励するやうになつてから、到底従来の教育では外国商人と太刀打が出来ぬといふ所から、明治八年八月森有礼、富田鉄之助両人の主唱によつて東京に商法講習所が出来た。福沢諭吉の記した同所設立趣意書の中に左の一節がある。  
…（中略）…剣を以て戦ふの時代には剣術を学ばざれば戦場に向ふべからず。商売を以て戦ふの時代には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず云々。  
東京商法講習所を第一として主要都市に同種の学校が起り、幾度かの改正を経て今日

の商業教育の盛大を来たしたのである。これ等の学校から輩出し、商業界に活躍せられる人々の一部若しくは全部に対し、過去のある時代において士魂商才の標語が唱へられたとすれば、籍を一商業学校の教職に置く自分は、現在においても深く省みる必要があると思ふ。<sup>92</sup>

ここには、東京商科大学の教員として、「商業教育」を推進していた幸田の立場がよく示されている。「士魂商才」とは、「士魂」（武士の精神）と「商才」（商売の才能）をあわせもつことをいうが、幸田は明治の一時期この言葉が「標語」として用いられたことを批判する。近代になり国際社会のなかで活躍することが求められると、商人も「商法を研究」する学問が必要となる。「士魂商才」などでは対応できない、ということがこの論考の趣旨であろう。先述したように、幸田は、維新前後の社会の変化を念頭においた研究を続けてきたが、ここにもその視点がみられる。

もちろん、幸田成友が日欧通交史研究を実践していく要因の一つとして、東京商科大学における「文明史」研究の盛行を挙げることは早計であろう。しかし、三浦新七や村松恒一郎の研究が、日欧通交史研究をめざす幸田成友に少なからず影響を与えたことは間違いない。

ちなみに、当時、東京商科大学では、札差や長崎関係資料の大型コレクションの形成が進められていた。幸田は、平戸町の人別帳の調査について「所蔵者長崎市役所及び県立長崎図書館に対し、またこの小論文のために種々調査の労を煩はした図書館員増田廉吉氏に対し、謹んで感謝の意を表します。」<sup>93</sup>とあるのは、あるいは東京商科大学の長崎関係資料の蒐集と関係あるだろう。また、幸田は、附属図書館所蔵の資料を用いて、研究論文を発表している。こうしたことから、東京商科大学附属図書館は、幸田の研究の推進において大きな影響を与えたとみてよいだろう。いずれにせよ、教育、研究、あるいは図書の蒐集において、幸田成友が東京商科大学に果たした役割はきわめて大であり、林基氏の「商大（一橋）のほうでの研究教育は副業みたいなもの」（先掲）という指摘は正しくない。

おわりに

さて、本稿ではこれまで十分な位置付けがなされてこなかった幸田成友の歴史研究を、時系列に留意した上で体系的に整理した。その結果、幸田成友の歴史研究が、昭和初期を契機として大きな変転を遂げたことに着目した。最初に掲げた「なぜ、幸田成友は、昭和初期を境としてそれまでの経済史研究から日欧通交史研究へと研究の主軸をシフトさせていったのか」という問題に対する解答は、三つ用意できよう。

一つは、1930年代の日本の国際社会における孤立の状況を受けて、日本と欧州との通交

の歴史を明らかにすることによって、現状を間接的に批判しようと試みたことが挙げられる。幸田は史料批判を専らとする実証主義的歴史学者の代表格とされるが、その歴史学には、常に現実社会への鋭い反証が含意されていた。この時期、幸田が「日本人」「日本」についての記述を多くしている背景には、当時の国際情勢が密接に絡んでいたと推察できよう。この意味では、幸田の歴史学は、同時代の状況に厳しく規定されたものだった。

二つめは、一つめと関連して、幸田が有していた研究上の問題意識が大きく左右したと考えられる。すなわち、「明治維新とは何だったのか」というテーマから、「日本人とは何か」というテーマへの問題関心のシフトを意味した。そしてそのなかでもっとも重視されたのは、個人（主体）の位置づけである。1920年頃までの幸田の主要なテーマは、明治維新をどのように理解するかにおかれていた。幸田の徳川時代研究は、明治期との比較のうちに存在している点は、すでに論じてきたとおりである。この江戸から明治への転換期における経済構造の変化と、そのなかを生きた主体の動きに注目する視点が、幸田の研究の主眼であった。しかし、昭和初期を契機に、幸田の問題関心は、国際社会のはざまのなかで生きた主体への考察へと深化していった。幸田にとって、歴史上の転換期は、三つあった。一つは、16世紀から17世紀前半にかけての「分裂」から「統一」へ向かう時代、もう一つは、江戸から明治へと変わっていく19世紀中ごろ、そして最後に、幸田が同時代として生きた昭和初期が挙げられるだろう。いずれも対外関係が重要度を増した時代であった。このなかにおける主体の位置について、史料をもとに考証していくことが幸田の歴史学の真髓であった。この意味で、幸田の歴史学は、同時代の状況に規定されたものであったといえよう。

三つめは、東京商科大学の教員という立場との関連も指摘できる。幸田の在職中、東京商科大学は、文明史、西洋史、外交史の講座が多く開かれ、熱心な教育がおこなわれていた。幸田成友も、広義の「文明史家」の一人として考えることができよう。それは、先述した増田四郎の述懐からも明らかである。もちろん、理論重視の三浦新七らの歴史学と、幸田の実証主義的歴史学は基本的に分けて考える必要もあるが、両者には共通する部分も多かったとみられる。

このように、日本経済史研究から日欧通交史研究へと大きく研究をシフトさせた幸田成友の歴史研究であるが、主体に対して深く注目する視点（佐々木氏の言葉を借りれば、主体への「愛情」）は、終始一貫していた。主体への配慮は、その背景となる社会経済の分析を要求する。幸田の研究が、変転していった背景には、主体へのこだわりがあったようにも考えられる。

さて、現実社会への批判を背景としていた幸田の歴史研究も、戦前・戦時下の時代背景のなかでは、「日本人」という強いナショナリズムを喚起するベクトルとしては機能するが、正しい方向 — 国際協調への道 — へと日本の「国民」を導く結果には至らなかった。多くの歴史家が、1930年代を契機として右傾化し、「日本精神」なるものを主張していくようになることは周知であるが、幸田の変転も、結果は異なるものの、きっかけは同じであったのではないか。ただ、国内の多くの知識人が内発的契機から「日本」を説明しようと試みるなか、外発的契機から「日本」を説明しようとした点に幸田の独自性があり、その点がまさに極端な右傾化を妨げる大きな要因となったと考えられる。

果たして、この姿勢が近代的知識人の姿として模範といえるものかどうかは評価の分かれるところであるが、戦中を生きた一個の歴史家の姿として考えていく必要はあるだろう。

年度	予科科目	本科科目	附属商学専門部
大正9年(1920)	歴史(川上多助)、	商業史(三浦新七)、経済学史(福田徳三)、外交史(林毅陸)、	商業史(三浦新七)、経済史(三浦新七)、経済学史(福田徳三)
大正11年(1922)	西洋歴史(木村重治)、日本史・東洋史(川上多助)、歴史(幸田成友)	経済史(三浦新七)、文明史(三浦新七)、経済学史(高田保馬)、東洋外交史(根岸信)、日本経済史(幸田成友)、外交史(林毅陸)、法制史(三浦周行)、哲学史(天野貞祐)、米國政治史(木村重治)、民俗学(桑田芳蔵)、日本経済史(瀧本誠一)、哲学史(桑木殿翼)、哲学史(朝永三十郎)、	商業史(三浦新七)
昭和元年(1926)	日本史・東洋史(川上多助)、西洋歴史(幸田成友)	文明史(三浦新七)、経済史(三浦新七)、東洋外交史(根岸信)、日本経済史(幸田成友)、経済史(金子鷹之助)、外交史(米田實)、農村社会史(小野武夫)、	商業歴史(三浦新七)、商業史(金子鷹之助)
昭和3年(1928)	日本史・東洋史(川上多助)、幸田成友(西洋史:在外研究中)、西洋史(齋藤茂)	経済史(福田徳三)、東洋外交史(根岸信)、哲学史(山内得立)、経済史(金子鷹之助)、経済学史(大塚金之助)、独逸近代思想史(吹田順助)、日本経済史(幸田成友)、外交史(米田實)、農村社会史(小野武夫)、文明史(三浦新七)、法制史(三浦周行)	商業史(金子鷹之助)、財政史(井藤半弥)、経済史(上原専禄)
昭和7年(1932)	日本史・東洋史(川上多助)、西洋史(幸田成友)、西洋史(村松恒一郎)	東洋外交史(根岸信)、山内得立(哲学史)、吹田順助(独逸近代思想史)、日本経済史(幸田成友)、経済史(金子鷹之助)、経済学史(大塚金之助)、経済史(村松恒一郎)、文明史(村松恒一郎)、日本経済史(猪谷善一)、外交史(米田實)、文明史(三浦新七)、法政史(瀧川政次郎)、欧州中世経済史(上原専禄)、日本法制史(川上多助)、西洋法制史(町田實秀)、	経済史(上原専禄)
昭和11年(1936)	日本史・東洋史(川上多助)、西洋史(幸田成友)、西洋史(村松恒一郎)	経済学史特殊問題(上田辰之助)、経済史(金子鷹之助)、経済史(村松恒一郎)、文明史(村松恒一郎)、文明史(三浦新七・三浦忠彦)、経済史特殊問題(上原専禄)、日本法制史(川上多助)、西洋法制史(町田實秀)、日本経済史(幸田成友)、東洋外交史(根岸信)	経済史(上原専禄)
昭和15年(1940)	国史・東洋史(川上多助)、西洋史(三浦新七)、国文学史(久松潜一)、西洋史(増田四郎)	経済思想史(上田辰之助)、経済史(村松恒一郎)、文明史(村松恒一郎)、日本法制史(川上多助)、経済史(上原専禄)、経済学史(山田雄三)、経済学史(高島善哉)、外交史(米田實)、文明史(三浦新七)、西洋法制史(町田實秀)、東洋外交史(根岸信)、日本経済史(幸田成友)	経済史(金子鷹之助)、経済史(増田四郎)
昭和17年(1942)	国史(川上多助)、西洋史(村松恒一郎)、西洋史(増田四郎)、東洋史(中山八郎)、支那思想史(板野長八)	独逸精神史(吹田順助)、経済思想史(上田辰之助)、経済史(金子鷹之助)、経済史(村松恒一郎)、文明史(村松恒一郎)、日本経済史(幸田成友)、西洋経済史(上原専禄)、経済学史(山田雄三)、文明史(三浦新七)、西洋法制史(町田實秀)、外交史(神川彦松)、	経済史(増田四郎)、国史(川上多助)

注記 『東京商科大学一覧』（一橋大学附属図書館蔵）より抜粋して作成した。なお、同一覧については、Hermes-IRにて全文ネット公開している。

- 1 昆野伸幸『近代日本の国体論』（ぺりかん社、2008年）所収論文参照。
- 2 長谷川亮一『「皇国史観」という問題』（白澤社、2008年）参照。
- 3 松沢裕作『重野安繹と久米邦武』（山川出版社、2012年）。
- 4 廣木尚『黒板勝美の通史叙述』（『日本史研究』624号）、2014年。
- 5 近年、松沢裕作氏を中心に、近代日本における歴史学者たちの研究が進められている。その成果の一つとして、松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』（山川出版社、2015年）などが発表されている。
- 6 拙稿「日本史学史における社会史研究（1）」（『日本社会史研究』100号記念誌、2012年）。

- 7 大正時代、いわゆる「アカデミズム史学」よりも、徳富蘇峰や白柳秀湖などのジャーナリスティックな在野の史論が一般大衆に受け入れられていった点も留意する必要がある。
- 8 西垣晴次「幸田成友」(今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家(1)日本編上』刀水書房、1997年)。
- 9 西垣前掲注(8)論考、pp.90-91より引用。
- 10 西垣前掲注(8)論考、p.92。
- 11 西垣前掲注(8)論考、p.93。
- 12 増田四郎「一橋歴史学の流れ」(一橋の学問を考える会『橋門叢書』13号、1982年)。引用文における傍線は著者による(以下同じ)。なお、本稿では、旧漢字を使わず、新漢字に修正して記した。
- 13 増田四郎「幸田成友」(永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』日本評論社、1976年)、p.195。( )内の補注は夏目による。
- 14 永原慶二「20世紀日本の歴史学」(『永原慶二著作選集』第9巻、吉川弘文館、2008年(初出 2001年)所収、p.368)。
- 15 「日本史」(佐々木潤之介分担執筆)『一橋大学学問史』、p.1030。
- 16 林基「三田の国史学と幸田成友」(『史学』60号、1991年)、p.31。
- 17 林前掲注(16)論文、p.32。
- 18 とくに、近年の成果としては、主に東京師範学校附属小学校在籍時を中心に検討した宮田純「幸田成友(1873-1954)の基礎的研究」(『21世紀アジア学研究』13号、2015年)、一橋大学附属図書館蔵の「幸田文庫」について検証した高橋菜奈子「幸田成友の経済史研究とその史料」(『経済資料研究』33号、2003年)などがある。
- 19 なお、幸田の略歴・経歴等に関しては、宮田前掲注(18)論文に詳細に示されている。
- 20 「仲兄郡司成忠」(1939年執筆、『凡人と半生』所収)『著作集⑦』を参照のこと。以下、『幸田成友著作集』第〇号については、『著作集〇』として略して記す。
- 21 林前掲注(16)論文、p.27。
- 22 たとえば、今宮新「恩師幸田先生の思い出」(『幸田成友著作集』月報8、1974年)、p.6など。
- 23 「凡人の半生」(初出：共立書房、1948年)『著作集⑦』、p.92。
- 24 林基「幸田先生の思い出」(『幸田成友著作集』月報4、中央公論社、1972年)、p.3。括弧は夏目による。
- 25 幸田の三浦按針論は、『史話東と西』(中央公論社、1940年)に収録されている(『著作集④』に所収の論文)。
- 26 実際、リースは演習の授業のなかで、伊達政宗の遣欧使節一件に関し、政宗からローマ教皇に宛てたラテン語の文書をテキストとしていたという(「凡人の半生」『著作集⑦』、p.92)。こうしたリースの研究(教育)が、幸田の日欧通交史研究に与えた影響は大きい。
- 27 原勝郎『日本中世史』(第一巻、富山房、1906年)、内田銀蔵『日本近世史』(第1巻、上冊、富山房、1903年)など。
- 28 H. チースリク「真のヒューマニスト」(『著作集③』月報3、1973年)、p.7。
- 29 幸田成友「イザーク・チチング」(『一橋論叢』第1巻6号、1938年)、『著作集④』に所収。
- 30 幸田成友『聖フランシスコ・ザビエー小伝』(創元社、1941年)、昭和5年(1930)12月、国史回顧会での講演がもとになっている。『著作集③』に所収。
- 31 大塚久雄「追分での幸田成友先生」(『幸田成友著作集』月報6、1972年)、p.2。括弧は夏目。
- 32 ただし、「欧州一覽」のなかでは、「若い頃の希望であった外国留学の幸運が、五十何歳になつて始めて自分を見舞つてくれた。自分の喜悦は人一倍で、勇み進んで目的地たる和蘭に向つた。」とも述べている(『旅と伝説』7巻3号、1934年3月(『著作集⑦』に所収)、p.177)。

- 33 木村毅「幸田成友博士」(『幸田成友著作集』第3巻月報1、1973年)、p.2。括弧は夏目。
- 34 『旅と伝説』7巻3号、1934年3月(『著作集⑦』に所収)、p.183。なお、本稿における引用文では、旧漢字は新漢字に修正して記した。また、幸田成友執筆の文章の引用は斜体にし、他と区別した。
- 35 本稿34頁×16行の引用文を参照のこと。
- 36 幸田成友「ギリシヤ雑筆」(初出：『一橋新聞』第96～98号、1929年)、『著作集⑦』、p.222。
- 37 幸田成友「和蘭夜話」(初出：『和蘭夜話』同文館、1931年)、『著作集⑦』、p.209。
- 38 この点について、ヨーロッパ留学時の幸田成友の面会した木村毅氏は、「私も数か月をおいて留学し、ヨーロッパで会ってみると幸田博士は、立ちぎわの気焔をすっかりおさめ、オランダの文書館が未発掘の史料の大宝庫であるのに圧倒されておられる形であった。」と述べている(「幸田成友博士」『幸田成友著作集』月報1、1971年)。
- 39 『史話東と西』に所収(のち『著作集④』再録)、初出は、『東寶』1938年5月号。
- 40 『史話東と西』に所収(のち『著作集④』再録)、初出は、『学燈』41巻1号、1937年1月号。
- 41 幸田成友「日蘭通交小史」(初出：『和蘭雑話』第一書房、1934年)、(『著作集④』、p.17)。もとは、昭和7年(1932)6月24日におこなわれた講演という。
- 42 たとえば、「西洋の古い史料に見えた大阪」(初出：『社会経済史学』6巻9号、1936年)、『史話 東と西』所収、『著作集④』に再録。
- 43 ちなみに、今宮新氏は、「先生が日欧通交史を研究するに至ったのも、その外国語に対する自信と驚くべき愛書癖とによるものであったろう。」と指摘している(「恩師幸田先生の思い出」『幸田成友著作集』月報8、1974年、p.7)。
- 44 幸田成友『日欧通交史』(岩波書店、1942年)、『著作集③』、p.5。
- 45 『朝日新聞』朝刊、1901年5月23日。
- 46 児玉幸多「一つの感想」(『幸田成友著作集』月報5、中央公論社、1972年)、p.4。
- 47 幸田成友「大阪市史の編纂について」(『読史余録』大岡山書店、1928年)、『著作集⑦』、p.369。
- 48 大阪史参事会編『大阪市史』第一、大阪市役所蔵版、1913年、p.2。
- 49 幸田成友「大阪市史編纂について」(先掲『著作集⑦』、p.126)。
- 50 幸田成友「品川町史を読む」(初出：『時事新報』1933年3月2日 夕刊)、(『著作集⑦』、p.306)。
- 51 「大阪史編纂談(上)」(『大阪朝日新聞』1902年12月29日)。
- 52 豊田武氏は、「博士が長い間『大阪市史』の編修に当られ、近世大阪に関する歴大な史料の蒐集と研究に従事されたことは有名な事実であり、今日その史料は幸いにして焼失をまぬかれ、現地に保存され、大阪研究の何よりの宝庫となっている。江戸について蒐集された貴重な史料が一橋大学の図書館その他に蔵されている。それを見ると、博士の蒐集が断簡零墨にも及んでいることが知られ、また博士がどんなに愛書家であったかを、商業史料の面からうかがうこともできる。」(「封建都市研究の遺産」『幸田成友著作集』月報2、中央公論社、1972年、p.3)と述べているが、アーカイブ化の視点からも幸田の仕事は高く評価される。
- 53 橋本増吉「追悼 幸田成友博士の思い出」(『社会経済史学』20巻3号、1954年)、p.93。括弧は夏目注。
- 54 幸田成友「姉と妹と自分」(初出：1951年)(『著作集⑦』、p.120)。
- 55 一橋大学附属図書館 Qfa-1。大正7年2月9日の購入印、「渋沢文庫」印が押されている。
- 56 一橋大学附属図書館の「幸田文庫」の内訳については下記を参照のこと。  
<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/bunko/kouda.htm>

- 57 幸田成友「大阪市史編纂について」（先掲）『著作集⑦』、pp.134～135。
- 58 幸田成友「日本経済史研究」（初出：大岡山書店、1928年）、『著作集①』、p.33。
- 59 三田村鳶魚『日本経済史研究』幸田成友氏の力著（『朝日新聞』朝刊、1928年12月14日）。
- 60 幸田成友「日本経済史研究」（先掲）『著作集①』、p.297。
- 61 幸田成友「日本経済史研究」（先掲）『著作集①』、pp.323～324。
- 62 幸田成友「日本経済史研究」（先掲）『著作集①』、pp.472～473。
- 63 幸田成友『江戸と大阪』（富山房、1934年）、『著作集②』に所収。引用は、『著作集②』、p.514頁より。
- 64 杉本栄一関係資料（一橋大学附属図書館貴重資料室蔵）。
- 65 幸田成友「豊臣時代の大阪」（初出：大阪市立大阪高等商業学校校友会・商業研究会編『課外講演集』1907年）『著作集⑤』、pp.19～20頁。
- 66 幸田成友『歴山大王』（博文館、1900年）。
- 67 幸田成友・坂本健一供述／歴史及地理講習会編『西洋史講義』（吉川弘文館、1902年）。
- 68 ロバート・マッケンジー著／幸田成友訳『十九世紀史』博文館、1896年、p.1）。
- 69 幸田成友「維新前と維新後」（初出：1935年の「慶応義塾商業学校第三回課外講義」）『著作集②』、p.435。
- 70 幸田成友「聖フランシスコ・ザビエー小伝」（初出：創元社、1941年）『著作集③』、p.296。
- 71 幸田成友「日本の文化に及ぼした和蘭の影響」（初出：『史話東と西』（中央公論社、1940年）に所収。ただし執筆は、一九三七年）、『著作集④』に再録。
- 72 たとえば、「通事ヨハン・ロドリゲス師」（初出：1940年）のなかで、「十六、十七世紀は日本の歴史の中で最も興味あり、また最も重大な時期の一つである。さうしてこの時代の歴史の最も重要な史料として、当時日本に在留してゐた耶蘇教会の教師達の書翰や報告や史的著述がある。」（『著作集③』、p.385）と述べている。
- 73 「日蘭通交小史」（初出：『和蘭雑話』第一書房、1934年）『著作集④』、p.29。
- 74 幸田は、「幼少期、「史論ではマコーレー、文学物ではアービング、政治物ではスペンサーやミルを読んだ。」と述べている（『外国語修養』（初出：1942年）『著作集⑦』、p.459）。
- 75 幸田成友「保科正之」（初出：『江湖文学』5号、1901年）『著作集⑤』に所収）。
- 76 幸田成友「保科正之」（先掲）『著作集⑤』、p.34。
- 77 幸田成友「保科正之」（先掲）『著作集⑤』、p.46。
- 78 幸田成友『大塩平八郎』（東亜堂書店、1910年）、『著作集⑤』所収。
- 79 森鷗外「大塩平八郎」（『天保物語』鳳鳴社、1914年）。
- 80 幸田成友「大塩平八郎」（初出：東亜堂書店、1910年）『著作集⑤』、pp.151～152。
- 81 幸田成友「続福澤全集第一巻を読む」（初出：『三田評論』432号、1933年）『著作集⑦』、p.308。
- 82 幸田成友「日欧通交史」（初出：岩波書店、1942年）『著作集③』、p.253。
- 83 幸田成友「日欧通交史」『著作集③』、p.272。
- 84 及川完「幸田成友著『日欧通交史』（『一橋論叢』11巻3号、1943年）、pp.121～122。
- 85 幸田成友「史実の誤解と曲解」（初出：『歴史』16巻1号、1941年）『著作集⑦』、p.453。
- 86 幸田成友「嘘か實か」（初出：『苦楽』2巻4号、1947年）『著作集⑦』、p.481。
- 87 H. チースリク「真のヒューマニスト」（『幸田成友著作集』月報3、1973年）、p.7。
- 88 増田前掲注（13）論考、pp.198～199。引用文中の括弧は、夏目による補注。
- 89 今宮新前掲論考、p.6。
- 90 林基前掲論文、p.28。
- 91 この事情について、「姉と妹と自分」（先掲）には、次のように述べられている。



---

…それから間もなく自分は東京商科大学予科教授兼同大学助教授となり、両校を掛持して無事数年を経た。一夕同僚移川子之蔵氏と閑談を交へた節、少年時代からの希望について縷々物語った処、「君は何故相手にそれを語らぬか。なに相手は誰だと。言ふまでもなく学長さ」と答へられた。自分がこの忠言に励まされて、佐野善作学長を訪問した結果御希望については出来る限り尽力しますとの即答に接し、爾来一日千秋の思で、その発令を待受けた。

やがて留学の命は下つた。留学先は和蘭、期限は一ヶ年半とある。昭和三年三月数へ歳五十六歳の自分は人一倍欣喜踴躍して和蘭の首府デン・ハーグに向つた。(『著作集⑦』、p.121)

<sup>92</sup> 『著作集⑦』、p.450。原文は、『朝日新聞』(朝刊、1937年4月2日・3日・5日)に掲載されたものである。

<sup>93</sup> 幸田成友「長崎平戸町人別帳二種」(初出：1933年)『著作集④』、p.180。

【論文】

幸田成友論：経済史から日欧通交史への断層

夏目琢史（一橋大学附属図書館研究開発室）

要旨

20世紀に活躍した著名な歴史学者の一人である幸田成友は、1930年頃を画期として、「日本経済史」研究から「日欧通交史」研究へとその対象を変化させた。本稿は、その背景について、当時の時代状況をふまえて総合的に検証したものである。

キーワード

幸田成友、日本経済史、日欧通交史、第二次世界大戦

[Article]

*Study of Koda Shigetomo*

Natsume, Takumi.

Research Development Office, Hitotsubashi University Library

**Abstract**

Shigetomo Koda, a notable historian of twentieth century, changed his research subject from “economic history of Japan” to “history of relationship between Japan and Europe” around 1930. This paper examine its background, based on the situation at that time.

**Keywords**

Shigetomo Koda, Economic history of Japan, History of relationship between Japan and Europe, World War II, WW II